

語いと英語教育(26)

語い指導(2)

2003年2月20日

東京都中学校英語教育研究会

研 究 部

《 研究部のホームページ <http://www.eigo.org/kenkyu> 》

語いと英語教育 (26)

語い指導 (2)

2003年2月20日

目 次

あいさつ	3
研究部の歩み	4
前年度の研究のあらまし	9
今年度の研究	10
語い指導 (2)	
1 研究の概要	10
2 キー項目の説明と利用法	11
3 データから読みとれること	16
4 語い指導の実践例	19
5 研究部のホームページと登録者数（都道府県別）	24
今後の課題	26
参考文献	26
編集後記	27

語いと英語教育(26)に寄せる

東京都中学校英語教育研究会

会長 太郎良 博

今年度もまた、東京都中学校英語教育研究会研究部の成果を載せた冊子が発刊されることになりました。振り返りますと、1976年度(昭和51年度)に初めて「英語教師のニードとその資料源」と題して、第1号の研究冊子が出されてから、既に26年という長い年月が経過しております。その間、研究部は「語いについての調査・研究」を継続して行って参りました。この活動は、一言で申しますと非常に地味なそして基礎的な調査・研究であります。言葉というものには必ず「語い」があり、それがあるときは音声として現れ、またあるときは文字として現れます。このように考えますと「語いについての調査・研究」を行うことは言葉の学習にとって最も普遍的な、基礎的な、そして重要な活動であることがお分かり頂けるのではないのでしょうか。このような意味合いから、研究部が長年にわたり「語いについての調査・研究」を行ってきたことの意義は極めて大きいと言わねばなりません。以上述べましたような視点から、本調査・研究の成果についてご高覧頂ければと思うものであります。

平成14年度から完全実施されました指導要領においては、中学校3年間で指導すべき語いは900語程度までとされ、従前に比べてさらにその数が減じられております。これらのことについても、日本人のこれからの英語能力の伸長を考えた場合、それが果たして適切なことであるのかどうか、今後十分に吟味検討されるべき事柄と申せましょう。つまるところ、初等中等教育における英語教育の視点を何処に置くかということに帰結する問題のように思われます。すなわち、「英語教育方法改善の推進に関する懇談会報告」に従えば、「国民全体に求められる英語力」と「専門分野に必要な英語力や国際的に活躍する人材などに求められる英語力」という2つの視点から考えた場合に、中学校英語に求められる語いの量はどうか、またどのような語いが必要とされるかが課題となります。このように語いの問題一つとっても、それは「英語教育はどうか」ということに関連してくるわけでありまして。以上、述べて参りましたのも、語いが言葉の学習にもつその重要性について明らかにしたかったからであります。このような視点からも、是非、語いの問題について関心を持って頂き、今回のまとめにつきましても忌憚のないご指導を賜りたく存じます。

最後になりましたが、本研究に携わって参りました研究部員の努力はもとより、各関係各位の様々な形でのご指導、ご支援に対し、心から謝意を申し上げます。

研究部の歩み

東京都中学校英語教育研究会・研究部では、1976年（昭和51年）より下記のような研究を継続的に行ってきた。今年度の研究もこの延長線上にあるものである。

- 1976（昭和51）年度 「英語教師のニードとその資料源」
研究授業者：森永 誠（北区立赤羽台中学校）
指導講師：福田 大昭（都立教育研究所）
- 1977（昭和52）年度 「英語教師のニードとその資料源 その2」
「外来語と英語教育（1）」
- 小学校高学年教科書に現れた外来語リスト -
研究授業者：里見 光昭・宗政 剛郷（千代田区立麹町中学校）
指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）
- 1978（昭和53）年度 「外来語と英語教育（2）」
- 中学校英語教科書に現れた外来語リスト -
研究授業者：野中 清（江東区立深川第二中学校）
指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）
- 1979（昭和54）年度 「外来語と英語教育（3）」
- 外来語の強勢付加によっておこる変化 -
研究授業者：萩野 浩・須田 昌義（千代田区立一橋中学校）
指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）
- 1980（昭和55）年度 「外来語と英語教育（4）」
- 英語の意味別頻度と外来語・英語の意味とのかさなり -
研究授業者：後関 正明（墨田区立両国中学校）
指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）
- 1981（昭和56）年度 「外来語と英語教育（5）」
- フォニックス（つづり字と発音のルール） -
研究授業者：小林 幸子（千代田区立鍊成中学校）
指導講師：若林 俊輔（東京学芸大学）
- 1982（昭和57）年度 「外来語と英語教育（6）」
- 選定語いについて -
研究授業者：小西 照明（足立区立伊興中学校）
指導講師：堀口 俊一（東京学芸大学）

- 1983 (昭和58) 年度 「語いと英語教育 (7)」
 - 選定語い (2) ・ 発表語い (1) ・ 外来語と英語教育 (7) -
 研究授業者：長 勝彦 (江東区立第三亀戸中学校)
 指導講師：若林 俊輔 (東京外国語大学)
- 1984 (昭和59) 年度 「語いと英語教育 (8)」
 - 発表語い (2) 外来語と英語教育 (8) -
 研究授業者：蔦原 秀子 (新宿区立西戸山中学校)
 指導講師：森住 衛 (大妻女子大学)
- 1985 (昭和60) 年度 「語いと英語教育 (9)」
 - 「英語基本語い1000語」と「補足460語・外来語(英語)400語」
 Interim Report
 「外来語と英語教育 (9)」
 言葉遊びをとり入れての指導実践例 -
 研究授業者：長 勝彦 (墨田区立両国中学校)
 指導講師：若林 俊輔 (東京外国語大学)
- 1986 (昭和61) 年度 「語いと英語教育 (10)」
 A. 英語・基本語い1000語・Appendices
 B. 授業の中でどのように語いをふやすか
 C. C L T (Communicative Language Teaching) について
 研究授業者：日臺 滋之・Ms. Yvonne Broekman (Australia)
 (新宿区立牛込第三中学校)
 指導講師：隈部 直光 (大妻女子大学)
- 1987 (昭和62) 年度 「語いと英語教育 (11)」
 A. 基本語いの定着化 - 授業の中でどのように語いをふやすか (Part 2) -
 (Bingo Game , Guess Work , Pair Work & Skit を行って)
 B. CLT(Communicative Language Teaching) と CF(Communicative Functions) について
 - 東京都公立中学校で使用されている 4 種類の教科書に現れる
 Functions (言語機能) / Forms (言語形式) の学年別 Function List -
 C. Assistant English Teacher に関するアンケート調査のまとめ
 - AET 導入の年数・採用方法・派遣状況・派遣時数・その他 -
 研究授業者：青木 弘子・Mr. Phillip Roberts (Australia)
 (新宿区立牛込第三中学校)
 指導講師：塩澤 利雄 (宇都宮大学)

1988 (昭和63) 年度 「語いと英語教育 (12)」

A. NHK ラジオ続基礎英語 (1986.4 ~ 1987.3) の dialogs に現れる
伝達機能とその言語形式

B. 日常の授業で活用できる伝達機能とその言語形式

研究授業者: 福井 康真・Ms. Robarta Schudrick(U.S.A.)(千代田区立九段中学校)

指導講師: 萩野 浩 (聖徳短期大学)

1989 (平成元) 年度 「語いと英語教育 (13)」

CLT(Communicative Language Teaching)と CF(Communicative Functions)について

東京都公立中学校で使用されている4種類の教科書に現れる

Functions (言語機能) / 例文の List

研究授業者: 鶴田 峰子・太郎良 博 (大田区立南六郷中学校)

指導講師: 斎藤 誠毅 (神奈川大学)

1990 (平成2) 年度 「語いと英語教育 (14)」

A. 日常の授業で活用できる言語機能とその言語形式 (続)

- 実情報にかかわる機能 -

B. 東京都公立中学校における英語教育実態調査報告

研究授業者: 山本 展子・Mr. Frank Berberich (U.K.)

(江東区立深川第七中学校)

指導講師: 島岡 丘 (筑波大学)

1991 (平成3) 年度 「語いと英語教育 (15)」

日常の授業で活用できる言語機能とその言語形式 (続々)

- 意志・感情にかかわる機能の言語形式の Register について -

研究授業者: 二宮 正男 (狛江市立狛江第一中学校)

指導講師: 青木 昭六 (愛知学院大学)

1992 (平成4) 年度 「語いと英語教育 (16)」

A. Teacher Talk (1)

B. 日常の授業で活用できる言語機能とその言語形式

- 意志・感情にかかわる機能の言語形式の Register に対する Native
Speaker の Comments -

研究授業者: 北原 延晃 (杉並区立和田中学校)

指導講師: 上田 明子 (津田塾女子大学)

1993 (平成5) 年度 第17回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会東京大会

Teacher Talk (1)

研究授業者: 杉本 薫 (墨田区立両国中学校)

指導講師: 若林 俊輔 (東京外国語大学)

1993 (平成5) 年度 「語いと英語教育 (17)」

Teacher Talk (2)

研究授業者：重松 靖 (府中市立第七中学校)

指導講師：金谷 憲 (東京学芸大学)

1994 (平成6) 年度 「語いと英語教育 (18)」

Teacher Talk (3)

研究授業者：三浦 邦彦 (足立区立第三中学校)

指導講師：森永 誠 (聖徳大学短期大学部)

1995 (平成7) 年度 「語いと英語教育 (19)」

Teacher Talk (4)

研究授業者：石井 亨 (江東区立南砂中学校)・Mr. John Walding(U.K.)

指導講師：佐野 正之 (横浜国立大学)

1996 (平成8) 年度 「語いと英語教育 (20)」

研究部の歩みと

「語いと英語教育」第1集～19集のダイジェスト版

研究授業者：長 勝彦 (墨田区立両国中学校)

1997 (平成9) 年度 「語いと英語教育 (21)」

Teacher Talk (5)

Student Talk (1)

研究授業者：太田 洋 (東京学芸大学附属世田谷中学校)

指導講師：投野 由紀夫 (東京学芸大学)

1998 (平成10) 年度 「語いと英語教育 (22)」

Student Talk (2)

研究授業者：原田 博子 (江東区立深川第五中学校)

指導講師：和田 稔 (明海大学)

1999 (平成11) 年度 「語いと英語教育 (23)」

Student Talk (3)

研究授業者：小柳 守生 (葛飾区立亀有中学校)

指導講師：松本 青也 (愛知淑徳大学)

2000 (平成12) 年度 「語いと英語教育 (24)」

Student Talk (4)

研究授業者：阿久津 仁史 (文京区立第八中学校)

指導講師：緑川 日出子 (昭和女子大学)

2001 (平成13) 年度 「語いと英語教育 (25)」

語い指導(1)

研究授業者：門松 裕之・佐藤 恵美 (墨田区立文花中学校)

指導講師：山内 豊 (東京国際大学)

2002 (平成14) 年度 「語いと英語教育 (26)」

語い指導(2)

研究授業者：伊地知義信 (豊島区立西巢鴨中学校)

指導講師：望月 正道 (麗澤大学)

昨年度の研究のあらまし

昨年度までの「Student Talk」の研究を実践してみると、指導したい語いや生徒の使いたい語いが不十分であることがわかった。長年研究してきた Teacher Talk、Student Talk に続き、もう一度原点に立ち返り、語いの研究をテーマとすることにした。

まず部員の語いについての実践例を出し合ってみた。Pair work、ビンゴ、語いを増やす音声教材を使った指導、Collocation 指導、Chunk 指導、Oral Introduction (Interaction)、英語の歌、Category 別に語を書かせるなどが上げられた。そこで語い指導について、様々な方法を部員が共有するために Workshop を行うことにした。さらに語いテストについても検討した。

生徒が使う新しい教科書ではどのような語が入っているのだろうか。新学習指導要領では必修語いが機能語だけの100語となり、教科書に使われる内容語がそれぞれの教科書会社によるものとなった。7社全部に共通する語にはどのようなものがあるのだろうか。多くの教科書で共通して使われている語いは何だろうか。生徒が言語活動で使いたい語いがどの程度含まれているのだろうか。日本の中学生が学習する語いを知るところから始めようと考え、平成14年度の新教科書に現れる語いについてまとめてみることにした。また東京都では7社全社の教科書が採択されたことも研究を進める一因となった。そこで、表計算ソフトに新しい教科書の語いを入力し、それらの語いを品詞や Category 別などに分け、そのデータを研究部のホーム・ページに載せ、多くの方々が利用できるようにした。

今年度の研究

語い指導 (2)

1 研究の概要

昨年度は7社の検定教科書に出現する語いのリストを作成したが、一部に不具合が散見された。そこで今年度はその修正および授業で使用できる新たなキー項目の追加が大きな研究テーマになった。また、実際の授業でそのリストを使ってどのように語い指導をしたかという実践報告をお互いにしあった。さらに語い研究の専門家を招いて語いサイズ測定テストの学習会をしたり、語いリストから読み取れることをまとめる作業をした。研究活動の流れを月ごとに見ていくことにする。

4月18日 中央区立佃中学校にて

- ・研究組織作り
- ・研究内容の検討
- ・研究部員の指導学年、使用教科書、指導の形態などの調査

5月23日 佃中

- ・7社に現れる語いの重なり調査(パソコン使用)

6月24日 佃中

- ・5月入力データの不備の修正(パソコン使用)
- ・フォニックスルールをキー項目に加えることの検討

7月8日 佃中

- ・基本的なフォニックスルールをリストに加える作業(パソコン使用)
- ・中学生コーパスをキー項目に加えることの検討
- ・夏休み中の語い指導実践発表会についての提案検討

8月2日 日本橋中

- ・山本教諭の語い指導実践発表

8月5日 石神井中

- ・丸山教諭、大貫教諭の語い指導実践発表

8月28日 尾山台中

- ・稲葉教諭、石井教諭による語い指導実践発表

8月29日 狛江一中

- ・北原教諭による語い指導実践発表

9月24日 佃中

- ・部員の夏休み研修報告
- ・2学期以降の研究の流れについて

10月24日 佃中

- ・麗澤大学助教授 望月正道先生を講師に招いて語い研究の学習会
- ・一昨年度実施した「語いサイズテスト」についての再検討
- ・語いリスト分析の切り口と作業部会について

11月29日 希望丘中

- ・3つの作業部会による語いリスト分析(パソコン使用)

12月20日 佃中

- ・冊子原稿の検討
- ・語いリストの不備、不具合の徹底修正(パソコン使用)

1月17日 佃中

- ・研究発表会に向けての準備

2 キー項目の説明と利用法

(下の表は標準的な仕様のマイクロソフト・エクセルで「教科書語いデータ」を開いたものです。ソフトウェアの設定によって、画面の表示は異なる場合があります。ご注意ください。)

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
整理 番号	語い	教科 書	学 年	課	§	出 現 順	品詞	category	機能語	教 科 書 数	Phonics 1	Phonics 2	中 学 生 コ-パ°ス
1	cat	NH	1	0	0	1	名詞	生物	内容語	5			115
2	milk	NH	1	0	0	2	名詞	飲食	内容語	5			15
3	bus	NH	1	0	0	3	名詞	乗物	内容語	7			15
4	pen	NH	1	0	0	4	名詞	学校	内容語	4			109
5	dog	NH	1	0	0	5	名詞	生物	内容語	7			319
6	plane	NH	1	0	0	6	名詞	乗物	内容語	5	magic e		3
7	train	NH	1	0	0	7	名詞	乗物	内容語	7		ai	36
8	boat	NH	1	0	0	8	名詞	乗物	内容語	4		oa	9
9	bike	NH	1	0	0	9	名詞	乗物	内容語	4	magic e		7
10	piano	NH	1	0	0	10	名詞	その他	内容語	5			49
11	flute	NH	1	0	0	11	名詞	その他	内容語	2	magic e		2
12	guitar	NH	1	0	0	12	名詞	その他	内容語	5			37
13	notebook	NH	1	0	0	13	名詞	学校	内容語	5		oo	18
14	book	NH	1	0	0	14	名詞	学校	内容語	7		oo	143
15	pencil	NH	1	0	0	15	名詞	学校	内容語	5			43
16	baseball	NH	1	0	0	16	名詞	スポーツ	内容語	6			186
17	basketball	NH	1	0	0	17	名詞	スポーツ	内容語	7			145
18	tennis	NH	1	0	0	18	名詞	スポーツ	内容語	6			126
19	soccer	NH	1	0	0	19	名詞	スポーツ	内容語	6			190
20	* Mark	NH	1	0	0	20	名詞	人	内容語	1			0
21	* Demi	NH	1	0	0	21	名詞	人	内容語	1			0
22	* Becky	NH	1	0	0	22	名詞	人	内容語	1			0
23	* Brown	NH	1	0	0	23	名詞	人	内容語	4		ow	0

A 列(整理番号)から J 列(機能語)は、平成13年度研究紀要「語いと英語教育(25)」で発表したもの。
K 列(教科書数)から N 列(中学生コ-パ°ス)は「教科書語いデータ version 1.1」(平成14年9月更新)で追加された項目である。

A列(整理番号)からJ列(機能語)まで

		リスト作成上の基準・配慮事項																
A	番号	<ul style="list-style-type: none"> ・整理の関係上、今回集約したすべての語いに通し番号を振った。 ・語いは総数7319語になる。 																
B	語い	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的には1語を載せてあるが、一つの概念を表す切り離せないもの(例えば New York など)は2語で掲載する。 ・連語・熟語や I'm のような短縮語は掲載しない。 ・Canada, China のような題材語はその前に*印をつけて掲載する。 ・読み物の課で日本語訳つきの単語も掲載する。 ・lose - lost のような変化形は掲載する。 ・イラストや写真にあるが、文字が示されていない語いは掲載しない。 																
C	教科書	<ul style="list-style-type: none"> ・スペースの関係上、短縮記号で表している。記号と教科書名は下の表を参照。教科書の短縮記号(この表で使われている順) <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>NH</td><td>東京書籍</td> <td>NC</td><td>三省堂</td> <td>SS</td><td>開隆堂</td> <td>OW</td><td>教育出版</td> </tr> <tr> <td>To</td><td>学校図書</td> <td>Co</td><td>光村図書</td> <td>Tc</td><td>秀文館</td> <td></td><td></td> </tr> </table>	NH	東京書籍	NC	三省堂	SS	開隆堂	OW	教育出版	To	学校図書	Co	光村図書	Tc	秀文館		
NH	東京書籍	NC	三省堂	SS	開隆堂	OW	教育出版											
To	学校図書	Co	光村図書	Tc	秀文館													
D	学年	<ul style="list-style-type: none"> ・語いの初出の学年である。 																
E	課	<ul style="list-style-type: none"> ・1年教科書の表紙裏などにあって本課に入る前の語いには0を当ててある。 ・読み物の課はRで示してある。 ・Let's Talk など課と課の間にあるページに現れる語は前の課の番号をつけた。 																
F	§	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書によっては呼び名が違う場合もあるが「課」の中のセクションを表す。 ・1年教科書の表紙裏などにあって本課に入る前の語いには0を当ててある。 ・読み物の§は0で示してある。 ・Let's Talk など課と課の間にあるページに現れる語には0を当ててある。 																
G	出現順	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書に初出する順に、教科書ごとの通し番号を振ってある。 																
H	品詞	<ul style="list-style-type: none"> ・品詞を日本語で掲載する。 																
I	カテゴリ	<ul style="list-style-type: none"> ・その語がどのジャンルに入るかを日本語で示してある。(表2を参照) ・テキスト初出のページで使われている品詞、意味、文型で分類してある。(なお、今回は北原(研究部員)が授業で vocabulary building 活動を指導した時に使用した分類法を採用した。) 																
J	機能語	<ul style="list-style-type: none"> ・機能語か内容語かの別である。本研究では冠詞、代名詞、助動詞、前置詞、接続詞を機能語とした。田中正道(1991)によれば一部の形容詞・副詞も機能語に含んでいる。また松浪・池上・今井(1983)では1部の副詞も機能語に加えている。 																

分類項目一覧

品 詞	名詞 / 代名詞 / 動詞詞 / 形容詞 / 副詞 / 前置詞 / 冠詞 / 間投詞 / 数詞 / 接続詞 / 疑問詞 / 助動詞
動 詞	1型は第1文型で使用する動詞を表す。(以下同様) 2型 / 3型 / 4型 / 5型
名 詞	<p>生物 : 動物、昆虫、魚類、鳥類など</p> <p>飲食 : 飲物、食品、素材、調味料、料理名、食器、cutlery、台所用品など</p> <p>乗物 : 交通機関、その他移動の手段など</p> <p>学校 : 文房具、事務用品、教科、学校行事、教室にあるものなど</p> <p>家 : 部屋、建物の部分、家にふつうあるものなど</p> <p>人 : 名前、職業、人を表す言葉など</p> <p>世界 : 世界の地名、世界を表す言葉など</p> <p>スポーツ : スポーツ名、用具、ルール用語など</p> <p>時 : 時間の区分、順番を表す言葉など</p> <p>身体 : 身体の部分、病名など</p> <p>衣類 : 衣服、帽子、履き物、アクセサリなど身につけるものなど (英語で wear, put on / take off の目的語になるもの)</p> <p>自然 : 植物、自然を構成するもの、自然界にあるもの、人工でないもの</p> <p>電化 : 家庭電化製品、機械類など</p> <p>町 : 地図上の目印となるランドマーク、町を構成する建物・場所・概念など</p> <p>抽象 : 抽象的な言葉、invisible & uncountable nouns など</p> <p>その他 : 以上のどれにも該当しないもの</p>
形容詞	<p>感情 : 感情や気分を表すもの、人が主語になるものなど</p> <p>色・形 : 色や形を表すもの</p> <p>天候 : 天気や寒暖などを表すもの</p> <p>性質・性格 : 物や人の性質や性格を表すもの</p> <p>状態状況 : 物の状態や状況を表すもの</p> <p>数 : 数を表すもの</p> <p>その他 : 以上のどれにも該当しないもの</p>
副 詞	<p>時 : 時を表すもの</p> <p>場所 : 場所を表すもの</p> <p>数・頻・程 : 数量・頻度・程度を表すもの</p> <p>様態 : 様態を表すもの</p> <p>その他 : 以上のどれにも該当しないもの</p>

1. 使用教科書数 (K 列)

これはある語が何社の教科書で使用されているかを表す。リストの数字がそのまま使用教科書数になっている。

数字が7の語は東京都の全中学生が学習する語である。これは取りも直さず都立高校の入試問題に注釈なしで使われることが予想される。その意味で最重要語と言える。3年間で「発音できて」「意味がわかって」「綴りが書ける」ようになることが要求される。昨年度まではいわゆる「別表2」の語が全社に共通して使われていて「必修語」とも呼ばれていた。ところが今年度から「必修語」が機能語100語になった関係でその他の語はどれが大事でどれが大事ではないかの基準がなくなってしまった。生徒に教科書に使われるすべての語を覚えさせる(発音、意味、つづり)ことは不可能である。教師は生徒の負担を軽くするため理解できればよい語い(receptive vocabulary)と使える語い(productive vocabulary)を分けて指導すべきである。その点で本研究のリストは flash cards 作りに利用できる。狛江第一中学校では3人の英語科職員が相談して次のように本校独自の重要語を決定し、flash cardsの語に赤丸をしている。

教科書数7, 6の語・・・そのまま重要語とする。(総語数417語)

教科書数5の語・・・3人で協議して「ぜひ生徒に書いてほしい」語をピックアップして重要語とする。(総語数53語)

旧文部省指導要領(平成元年版)「別表2」の語数・・・506語

上の方法で認定した重要語の語数・・・470語(使用教科書はTotal English)

また2年生の比較を扱う課では、下のようにビンゴに研究部語いリストから選んだ語を使った。(語の下の数字は使用教科書数)生徒に指導するときには数字の意味を話した。

形容詞・副詞ビンゴ No. 1								
B : happy	long	short	large	easy	late	fast	hot	
7	7	7	6	7	7	7	7	
I : busy	great	young	strong	warm	old	big	small	
7	7	7	7	7	6	7	7	
N : dark	wide	deep	hard	new	high	tall	heavy	
4	2	4	7	7	6	6	6	
G : interesting	beautiful	different	useful	important	famous	popular	exciting	
7	7	7	7	7	7	6	5	
O : difficult	delicious	wonderful	careful	expensive	dangerous	excited	traditional	
5	5	5	4	4	4	4	6	

形容詞・副詞ビンゴ No. 2

B : hard	fast	soon	slowly	early	quickly	carefully	easily
7	7	7	6	6	5	3	2
I : good	well	many	much	little	bad	ill	far
7	7	7	7	7	7	1	4
N : happier	longer	shorter	larger	easier	later	faster	hotter
7	7	7	6	7	7	7	7
G : busier	greater	younger	stronger	warmer	older	bigger	smaller
7	7	7	7	7	6	7	7
O : darker	wider	deeper	harder	newer	higher	taller	heavier
4	2	4	7	7	6	6	6

また別の使い方として、N列の「中学生コーパス」と組み合わせると使用教科書数は少ないが生徒が使いたがる語の検索ができる。その他このキー項目の使い方は無限と言える。

2. Phonics 1 (L列)、Phonics 2 (M列)

これはフォニックスのルールのうち、日本の中学校英語教科書によく使われる語いに多く見られるものである。Phonics 1は magic e、いわゆる silent eである。「語尾が子音 + eで終わる語ではすぐ前の母音はアルファベットの名前と同じ発音となる」というルールである。Phonics 2は生徒がある程度語いを獲得した後で発音別にまとめるときに役立つルールである。すべて例外の発音を含む。例えば ea では tea[i:] という長母音がルールであるが、例外として breakfast[e]の発音を含む語も検索できるようにしてある。

長母音	ea	ee	oo(短母音[u]も含む)	au	aw
二重母音	ai	ay	oa	ou	ow
r がらみ	ir	ur	or	ear	
サイレント	gh				

使い方はいろいろあるが、新出語導入の時に以前にならった同じ発音の語を言わせるといった活動がある。例えば pool という新出語を導入する時に「他に [u:] を含む語は？」と聞いて、生徒からそれまでに習った語を言わせるとよい。room, school, cool, afternoon, zoo など多くの語があることが思い出されるだろう。こういう指導を繰り返していくとルール通りの語は発音できさえすれば綴りも書けるようになっていく。

3. 中学生コーパス（N列）

これは主に首都圏の8校の生徒約1000名が書いた英文（約10万語）に現れた語い分析結果（出現のべ数）である。内訳は次のようになっている。

- ・自己紹介（スピーチ）原稿
- ・授業中に言いたかったのに英語で言えなかった表現
- ・言語材料指定の自己表現英作文
- ・期末テストの英作文問題
- ・教科書の対話を変形させたプラスワン・スキットの原稿
- ・将来の夢スピーチ原稿
- ・自由表現ノート
- ・Show & Tell のビデオの発話
- ・夏休みの体験についての作文
- ・手紙
- ・自分のペットについての作文

生徒があるトピックについて話したり書いたりする時に使いたい語いが多く含まれていることがわかる。（be動詞は全部まとめてカウントされている、など分析の仕方が研究部語いリストの切り口と若干異なることがあることを了承いただきたい）なお、分析に当たっては株式会社ベネッセコーポレーションの協力を得たことを付記する。

このキーの利用法の例は次のようになろう。まず同じトピックで表現活動を行わせるときにあらかじめ語いをピックアップして生徒に与える方法がある。また、K列と組み合わせで教科書ではあまり出現しないが、生徒の日常生活を表現するのに不可欠ないわゆる「生活用語」をインプットするときにも使える。

3 データから読みとれること

1. 中学生コーパスでの頻度が高い語

教科書数は少ないが、中学生コーパスでの使用語いが多い語をあげてみる。

（1）動詞に関して

let は2社でコーパスは51である。camp は1社でコーパスは31。draw は2社でコーパスは28。forget は1社でコーパスは22。let のような場合どのように使われるかを知る必要がある。

（2）形容詞に関して

used は2社で使われているが、120と多い。cute は3社でコーパスは108と多い。コーパス使用のタイトルから推測すると、自己紹介があるので、used は中古品のという意味で自分のものを説明し、cute は自分のペットのことを説明したりする際に使われたと考えられる。

(3) 名詞に関して

2社で memory(70)がある。卒業する際のスピーチなどで、思い出を語る際に使われると考えられる。

2. 各社に共通の語数の割合

約	7社	6社	5社	4社	3社	2社	1社	7社総語数
	35%	11%	9%	8%	8%	9%	19%	約100%
	25% 文科省必修語い100語を除いた語数の割合							約7,100語

7社の欄の35%という数字は、教科書会社7社の本文に出てくる新出語の総語数約7100語のうち、約35%を7社全社が使用していることを意味している。

- (1) 7社全社に共通の語いが35%と、かなり多い。必修語い100語を除き、語いの選択は各社に任されていたので、各社がそれぞれの判断において語いを選択することとなり、共通の語いは少なくなるであろうと予測していたので、この結果は意外であった。7、6社合わせると46%、5社以上共通する語だと55%にもなる。つまり、各社の重要語とするものは、かなり重なっていると考えられる。
- (2) 本調査は題材語もカウントしているため、1社のみ採用の語彙はその教科書の題材に大きく影響されていると思われる。
- (3) 全社が採用した重要語がどの学年で出現するかという視点もある。例えば小学生でも知っている語が、中学後期で出現することもあった。open, under, money, hand, drink など。
- (4) 上記の考察は数字だけだが、内容を考えていくとさらにいろいろなことがわかるだろう。例えば、品詞別、カテゴリー別など。

3. カテゴリー別考察

(1) 名詞

町

ア 公共の建物を取り上げている教科書が少ない

museum 2社、fire station 1社、police station 1社、post office 1社

イ 利用する機会が多いのに取り上げている教科書が少ない語

department store 1社

ウ 身近にある宗教的な建物

Shrine 2社、Temple 1社、

衣類

ア Uniform 5社

生徒が使用する機会が多いためだろう。

イ 衣類を表す上位語*を採用している教科書が少ない

* 上位語とは、shirt, sweater, jacket のまとめた意味を表す clothes のような語
clothes 3 社、shoes 3 社

食べ物

ア 中学生コーパスでは頻度が多いが、使用教科書数が少ないもの

3 社 = apple、drink、fruit

イ 上位概念で使用教科書数が少ないもの

3 社 = fruit meal dessert juice vegetable

スポーツ

ア 「中学生コーパス」(3 で詳述)では多いが、使用教科書数が少ないもの

4 社 = ball(101) 3 社 = player(84) swimming(63) volleyball(64)

2 社 = game(212)

イ 「中学生コーパス」にはないが、使用教科書があるもの

2 社 = cricket(0)

電化

ア 家の中で使用する機会の多い電化製品名が教科書にない。

洗濯機、掃除機、冷蔵庫、電子レンジ エアコン

生物

ア 上位概念を表す語は多くの社が取り上げている

7 社 = tree bird 6 社 = animal fish plant 5 社 = flower

イ 個別(特殊な)の生物名はそれぞれの教科書題材によって使用されている。

例 T-rex 1 社、dinosaur 1 社、emu 1 社

ウ 日本人にとってなじみのある生物名を取り上げている教科書が少ない。

例 サンマ 桜 菊

世界

ア 中近東、アフリカの国々の名前が少ない。

人

ア 親類関係を表す語を取り上げている社が少ない。

例 cousin 3 社、niece nephew relative は使用教科書 0

イ 固有名詞が多い

ウ 本課本文ではあまり職業名を取り上げていない。

身体

ア 主要部分は扱っているが、細部の名称を扱っている教科書は少ない。

例 まつげ、まゆげ 親指など

乗り物

ア 生徒にとって身近な地下鉄を取り上げているのは 1 社(underground を使用)。

(2) 形容詞

否定的な感情を表すものを取り上げられてきた。

例 awful terrible

天候

humid や wet など日本の気候に関する語が取り上げられていない。

4 語い指導の実践例

1 Vocabulary Relay Game (英単語連想リレーゲーム)

山本 崇雄 (大田区立御園中学校)

(1) 目的

英語で連想ゲームを楽しみながら語いを増やしていく。

授業のウォームアップ

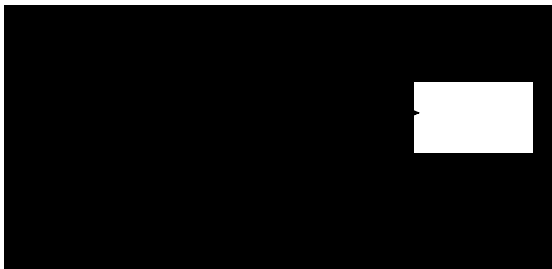
(2) 方法

2～4名のグループを作る。

スタートの単語を教師が指示する。スタートの所にその単語を書く。



最初の生徒は、最初の単語から連想する英単語を次の に書き入れる。ここでは “banana” から連想する単語を書き入れる。



次の生徒は “yellow” から発想する英単語を書く。

この要領で、リレー形式で連想する単語を書いていく。3分、5分など時間を区切りたくさんの単語を書いたグループが勝ちとなる。

(3) バリエーション

生徒のレベルに応じて辞書を許可しても良い。教え合いも良いが、書くのは本人が書く。

一人一枚シートを持ち、クラス全体で交換しあって進めても良い。

(4) 考察

辞書を使っても良いということで初期の辞書指導にも適している。連想ゲームであるが、単語同士の関連性をあまり重視すると、「語いを増やす」という目的からずれてしまう。多くの単語を書こうとする意欲を評価したい。授業の始めに取り組むと盛り上がる。課題としては未習の語などを書く際、意味の扱いをどうするか。辞書を調べた生徒だけでなく他に広げていくために、工夫していく必要がある。

2. Fill in the Blanks

丸山 篤広 (大田区立羽田中学校)

(1) 目的

空所に適切な語を入れさせることで、語と語のつながりを考えながらカテゴリ別に語いを習得させる。

(2) 方法

授業前にあらかじめ、研究部の語いリストのデータを品詞別・category別に並べ換えたものをプリントアウトしておく。

例1 すぐ後に目的語が来る動詞と目的語として使用する名詞について学ぶ場合

品詞：[動詞]、category：[3型]

例2 感情を表す形容詞と場面や場所について学ぶ場合

品詞：[名詞]及び[形容詞]、category：[町]及び[感情]

生徒は、提示されたターゲット文を見る。

例1 I () tennis.

例2 Jim meets Mary. Jim is very (). They go to ().

空欄に入る語を生徒に口頭で発表する。

例1 like, play, watch, love, enjoy, practice など

例2 hungry(happy, nervous)

a restaurant(an amusement park, Mary's house)

(3) バリエーション

Speechにつなげる

- ・例1 を次のように変えると、一連の dialogue となるので、speech の原稿づくりにも役立つ。

例 I like (). I () it every day. Yesterday I didn't do it.

My father taught me how to do it. My brother doesn't () it.

Next summer I will go to () to do it

(4) 考察

答えが1つに決まっていないこの活動に対して、生徒は意欲を持って取り組む。語句を板書しないため、つづりにとらわれず語句を発表できる。教科書本文を基に英文を作り、定着させたい部分を自由に変えられるので、教師の準備も少なくすむ。空欄部については生徒が入られる語句が多いかどうかで活動の盛り上がりも変わる。事前にリストを検討し、既習語・未習語について把握しておく必要がある。学習する文法事項によっては、口頭での練習に加えて同じ英文をプリントしたものを使い、学習の定着を図る。

また、スピーチの原稿づくりはバリエーションで紹介した方法で行い、生徒ができるだけ英語で考える機会を持てるようにする。

3. カテゴリー別語い指導

大貫 由季 (品川区立日野中学校)

(1) 目的

個人が持っている語いを引き出す
生徒個人が持つ語いを共有していく

(2) 方法

ディクテーションテストを行う。カテゴリーを与える。生徒はディクテーションテスト後、1分間で、余白部分に単語を書く。

例) Today's category・・・animals 板書

生徒は dog, cat, rabbit などと書いていく

教師はディクテーションテストを回収し、どのような単語を書いたか聞く。

生徒は、返されたディクテーションペーパーをディクテーションノートに貼る。つづりが怪しい語や分からない語などを辞書で調べてノートに書く。

例)

Dictation Card		Class () Name ()	

animals			
書けた語	cat, dog, monkey		
友達が言った語	snake, cow, mouse		
思い出した語	fox		
新しく習った語	whale, hippo		

(3) バリエーション

チームを作り、黒板を使ってカテゴリー別の単語競争をさせることもできる。

ディクテーションノートの書き方を工夫できる。

同じカテゴリーを期間をあけて与え、定着させる。

模造紙にカテゴリーのみを記入し、教室の壁に貼る。生徒が自由に単語を書き入れることができるようにして、語いを共有していく。

(4) 考察

カテゴリー別のカテゴリーをどうするかに迷うため、語いリストを活用した。生徒にとってどのような単語が定着しやすいのかノートを見ると分かる。

4 Burst out

石井 亨 (江東区立第二南砂中学校)

(1) 目的

授業で必要な語いを広げる。

生徒の知っている語いを引き出すことにより、生徒間の語い数のギャップを埋める。

(2) 方法

これから必要となる語いのカテゴリーを提示する。

例 I like ~ . という文を定着させるために Fruit に関する語いを広げておきたい。

生徒に紙を配布し、そのカテゴリーに入る語を3つ書かせる。書くことがねらいではないので、Spelling にはこだわらなくてよい。カタカナでもかまわない。

例 リンゴ、banana

隣同士のペア(S_1 と S_2)で、 S_1 が S_2 の書いた3つの語を S_2 の紙を見ないで当てる。

制限時間を設ける。(3つなら1分くらい)

S_2 が書いた語を当てられたら、「Hit」と言って印をつける。

時間が来たら、交代する。

(3) バリエーション

グループ・ワーク

A1	B1
A2	B2

AとBの4人グループにわかれて行う。

クラス全体の活動

教師または、誰か生徒の書いたものを元に他の生徒が当てる。

出てきた語いを板書して、音声指導などをしてよい。

ペア・ワーク(グループ・ワーク)の後に(2)のクラス全体の活動を入れてもよい。

それにより、ペアやグループで出てきた語いをクラス全体で共有できる。

研究部の語いリストから必要なものを用意しておき、生徒の知らない語を指導する。

(4) 考察

ウォーム・アップとして活動させ、その後の活動に結びつけたり、次の授業への布石として取り入れても良い。

ペアでの活動後にクラス全体の活動を入れ、全体で語いを共有させるとよい。

音声指導の必要があれば、随時指導する。

5 語いを広げる指導

北原延晃（狛江市立狛江第一中学校）

1～4では主に指導した語いを定着させる指導について述べてきた。ここでは授業中に新しい語い導入する指導を扱う。

(1) 指導対象の新出語 (Lesson 7C, Total English 2)

national	holiday	thing(s)	child	can	present	poor	simple	anything
----------	---------	----------	-------	-----	---------	------	--------	----------

(2) flash card の例

表	裏
n a t i o n a l	形 国の

* 形は形容詞の略

(3) 新出語の指導手順例

flash cards の表（英語面）を見せる。生徒は発音する。

再度、表を見せる。生徒が発音した後、教師がモデル発音を示す。

再び表を見せる。生徒が発音した後、発音に関することを言う。

* この場合は「他に tion がつく語は？」

生徒は station, vacation, communication などと言う。

また表を見せる。生徒が発音した後、教師は al の部分を手で隠して生徒に質問する。

「どう発音する？」 生徒が nation と発音できたら「意味は？」と聞く。

生徒が「国」と答えたらカードを裏返す。

教師は名詞から形容詞への変化の仕方を教える。「一部の名詞は語尾に al を付けると形容詞になるよ」「tradition - traditional, nature - natural, office - official, origin - original, profession - professional, industry - industrial, globe - global」(以上、使用教科書数は順に6, 3, 1, 1, 2, 1, 2)

教師は表をフラッシュさせて見せる。生徒は素早く発音する。

教師は裏を見せる。生徒は英語を言う。

教師は裏を見せて「spelling」と言う。生徒は空中に綴りを書く。

教師は表を見せる。綴りがあっていなかった生徒は手を挙げる。

(4) 上の新出語を使って広げることのできる語いの例

holiday	vacation, weekday, 日本の national holidays
child	children, adults
can	bottle, carton, steel, aluminum, tin
present	gift, birthday, Christmas, Mother's Day
poor	rich
simple	easy, difficult, complicated
anything	everything, nothing, something, anyone, anybody

もちろんこれらの語は全部板書する必要などない。板書する / しない、の判断はその語が productive vocabulary か receptive vocabulary かによる。

5 研究部のホームページと登録者数（都道府県別）

教科書データの活用は毎日の授業に直接結びつくものである。そこで都中英研研究部では、東京都だけでなく全国の英語教育実践者にこのデータを公開して、広く実践研究を推進していくことを考えた。

具体的な方法としては、1999年よりインターネット上に公開している研究部のホームページを利用して、昨年度の研究発表時(2002年2月21日)にこの「語い調査データの活用」を呼びかけた。次頁は研究部からの呼びかけ(再収録)である。

この呼びかけに対しては、全国から多数のアクセスがあり、「教科書語いのダウンロード」登録者数は2003年1月10日現在で、159名を数える。以下は都道府県別の登録状況である。

今後さらに呼びかけの方法を工夫し、より多くの方々と共に実践を進めていきたい。

登録者が6名以上の県・所属地区

東京都(38) 神奈川県(13) 埼玉県(8) 富山県(6) 大学(9)

登録者が5名以下の県・所属地区

青森県(1) 岩手県(1) 大阪府(1) 滋賀県(1) 静岡県(1) 島根県(1) 山梨県(1)
広島県(1) 愛知県(2) 長崎県(2) 山形県(2) 山口県(2) 愛媛県(3) 茨城県(4)
鳥取県(4) 三重県(4) 千葉県(5) 北海道(5) その他の学校(1)
企業(12) 文部科学省・教育委員会(9) 海外(2) 不明(4)

語い調査データの活用方法

(1)中英研研究部のホームページ

次の URL で公開中です。お使いのブラウザでアクセスしてください。

<http://www.eigo.org/kenkyu>

(2)データのダウンロード

データのダウンロードについては、登録をお願いします。登録内容は、【学校名、お名前、e-mail アドレス】の3点です。これは、データの権利保護上の措置で、他の目的で使われることはありません。登録は、次のページで行ってください。

登録が行われると、研究部ホームページ管理者よりパスワードが e-mail で送られてきます。このパスワードを使って、ダウンロードページに入り、データをダウンロードしてください。詳しい方法は、このページに記載されています。

(3)データの形式

データは次の形式で用意されています。データそのものの内容は同じです。使いやすいものを選んでください。

Microsoft Excel 形式(表計算ソフト) 約1.1MB

(Microsoft Excel 2000で作成しました。Lotus 123でも読み込むことができます。)

テキストデータ(カンマ区切りのデータです) 約300KB

エクセル以外の表計算ソフトやワープロ・ソフトで読み込むことができます。書式

も自由に設定できます。

なお、データが大きいので、回線の速度によってはダウンロードに時間がかかります。については、ZIP形式で圧縮したデータも用意しました。ご利用下さい。解凍については、ソフトウェアが必要になりますが、各自で準備してください。(ご希望の方には、解凍用のフリーソフトを紹介します。goi@eigo.org あてにご連絡下さい。)

(4) データの分析方法

予想される分析方法としては、この紀要の9ページの活用例をご覧ください。

参考のため、エクセルを使った「並べ替え」の操作方法を紹介します。

並べかえたいデータの領域を指定します。(マウスでドラッグ)

メニューより、「データ」 - 「並べ替え」を選択します。

並べ替えのキーを指定します。番号順に優先されます。

例えば、「1教科書 2品詞 3カテゴリー」を指定すると、データは「教科書ごと」「品詞ごと」「カテゴリーごと」の順で並べ替えられます。「語い」を指定すると、アルファベット順で並べられた語いが参照できます。「整理番号」を指定すれば、初期の順に戻ります。

「範囲の先頭行」では、指定した範囲の先頭がデータの一部か、タイトルなのかを指定することができます。1行目の項目がそれぞれのリストに示されます。「データ」を選ぶとキーの選択は「列A」のように列番号で指定することになります。

この「キーの選択」と「新しいキー(分類・分析項目)の追加」がこのデータの活用で最も重要なポイントになります。

(5) データの扱いについてお願い

ここでご案内している語いのデータは、中英研研究部がすべて文書により、教科書出版社からの許諾を得ているものです。その許諾は、「研究目的」による使用に限られています。その点を十分に理解してください。パスワードの管理については、利用者の責任でお願いします。

(6) 「語い」についての実践・研究の募集 ... 研究部からのお願い

これらのデータをこのような形で用意したのは、語いについての研究をみなさんとともに進めていきたいという願いからです。

活用例を用意するところまでは、今回の発表に間に合いました。しかしこの4月からは、新しい学習指導要領の完全実施にともない、全国で、新しい教科書を使った授業実践が繰り広げられます。

私たちは、この実践の中にこそ、この語い研究をすすめる道があると信じています。どうぞ、多くの活用例をお寄せ下さい。研究部では、定期的にこれらの活用例を検討して、「新たな活用実践」としてホームページで紹介していく予定です。

【「語い」についての実践・研究の募集】の主な内容

- ・ データの修正についての情報
- ・ 分類・分析項目(キー項目)の追加
- ・ このデータを使って行われた授業の実践例
- ・ 今後の展開についてのご意見など (e-mailでお送り下さい。) goi@eigo.org

今後の課題

今後の課題

昨年度、新学習指導要領に基づいた新しい教科書の分析に始まった本研究は、今年度は語いリストの整備、語い指導の実践が中心となった。

語いリストの整備では、昨年作成した教科書全7社の語いの整備及び新たな分類を、部員が手分けして分析・入力した。

この語いリストについて、本年度、研究部に講師としてお招きした麗沢大学の望月正道先生からのアドバイスも含めて、以下の課題が明らかになった。

ア、語いリストの改善

- ・ カテゴリーの見直し
- ・ データの修正
- ・ 新項目の検討

イ、その語がどういう単語と一緒に使われるのかが分かるものがあると良い(コンコーダンス)

ウ、語いリストを利用した指導の開発と実践の継続

エ、Student Talk との比較(ベネッセデータ以外に)

オ、語いデータの考察の継続

カ、他のコーパスとの比較(今の教科書の語いが本当に妥当なのか)

今後、さらなる実践をすすめていきたい。

参考文献

- The Oxford Picture Dictionary (Teachers' Book) J. Adelson-Goldstein 1998 O.U.P.
The Longman Picture Dictionary American (British) English J. Ashworth 1997 Longman
Assessing Vocabulary John Read 2000 C.U.P.
Implementing The Lexical Approach ... Putting Theory into Practice ...
Michael Lewis 1997 Language Teaching Publications
Vocabulary M. McCarthy 1996 O.U.P.
English Vocabulary in Use ... Elementary M. McCarthy 1999 C.U.P.
Vocabulary Morgan & Rinvolucri 1995 O.U.P.
Teaching & Learning Vocabulary Nation 1990 Heinle & Heinle
Vocabulary in Language Teaching Norbert Schmitt 2000 C.U.P
Test Your Vocabulary 1 Peter Watcyn-Jones 2002 Penguin English Guide
Working with Words Ruth Gains & Stuart Redman 1995 C.U.P.
英語語彙習得論 投野 由紀夫 1997 河原社
COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE (1 ~ 3) 2001 光村図書出版(株)
NEW CROWN ENGLISH SERIES (1 ~ 3) 2001 (株)三省堂
NEW HORIZON English Course (1 ~ 3) 2001 東京書籍(株)
ONE WORLD English Course New Edition (1 ~ 3) 2001 教育出版(株)
SUNSHINE ENGLISH COURSE (1 ~ 3) 2001 開隆堂出版(株)
TOTAL active . comm ENGLISH FOR ACTIVE LEARNERS (1 ~ 3) 2001 秀文館(株)
TOTAL ENGLISH ENGLISH COURSE (1 ~ 3) 2001 学校図書(株)

編集後記

今年度は新学習指導要領完全実施の年であり、東京都では教科書会社7社全部が採択され、先生にとっても生徒にとっても新しい教科書でスタートしました。

都中英研・研究部と言えば「語いの研究」と言われるくらい、それこそ長い歴史を重ねております。昨年度は「語いの研究」と言うよりも「語い調査」といった感もあり、今年度は多くの先生にご指導をいただきながら、部員一同力をあわせて「語いの調査・研究」を進めてまいりました。

学校は完全週5日制や何やらで忙しい毎日ではありますが、自分自身の勉強のため、そして部員の仲間と学んだことが共通の財産となり、またその財産を生徒に還元できることを信じて今年も頑張りました。部会は毎月1回夜遅く迄、そして夏期休業中も部員の学校に何回か集まりました。

研究部に長く所属しているベテランの先生方のリードよろしく若手の先生方も大変頼もしく感じられるようになりました。また研究部はどなたにでも、いつでも門戸を開いておりますので、私たちと一緒に熱心に研究してくださる先生がいらっしゃれば大歓迎です。また研究部の私たちが今までどんな研究を進めているかをお知りになりたいようでしたら、研究部のホームページにアクセスしていただければと思います。

<http://www.eigo.org/kenkyu>

最後になりましたが、この「語いの調査・研究」を進めるにあたって、東京都中学校英語教育研究会の太郎良 博会長、麗澤大学助教授の望月 正道先生をはじめ、多くの方々のご協力とご指導に心から感謝申し上げます。これからも多くの皆様のご理解とご指導をいただき、新たな挑戦をめざして頑張りたいと思います。

2003年2月20日 備里川 正人(研究部長)

今年度の研究に携わった研究部員(東京都中学校英語教育研究会研究部)

備里川正人(足立区立西新井中学校)	北原 延晃(狛江市立狛江第一中学校)
杉本 薫(中央区立佃中学校)	石井 亨(江東区立第二南砂中学校)
野口 弘子(都立南大沢学園養護学校)	鬼山由美子(足立区立第九中学校)
二宮 正男(世田谷区立希望丘中学校)	鶴田 峰子(中央区立日本橋中学校)
原田 博子(江東区立深川第五中学校)	横山 牧子(八王子市宮上中学校)
伊地知義信(豊島区立西巣鴨中学校)	大河由起子(足立区立蒲原中学校)
関口 智(品川区立東海中学校)	溪内 明(大田区立東調布中学校)
山本 崇雄(大田区立御園中学校)	稲葉 高広(世田谷区立尾山台中学校)
坂田 恵子(練馬区立石神井中学校)	丸山 篤広(大田区立羽田中学校)
大貫 由季(品川区立日野中学校)	岡崎 伸一(渋谷区立代々木中学校)
福井 洋子(多摩市立豊ヶ丘中学校)	

研究部のホームページ <http://www.eigo.org/kenkyu>

発 行 東京都中学校英語教育研究会
会 長 太郎良 博 (江戸川区立葛西中学校)

編 集 東京都中学校英語教育研究会研究部
研究部長 備里川 正人 (足立区立西新井中学校)

発行日 平成15年 2月20日